

アジア時報

4
1975

昭和45年8月3日第3種郵便物認可

昭和50年4月1日発行

毎月1回1日発行

通巻第60号

巻頭言——外交と論理

全国人民代表大会以降の中国

全人代と中国の今後

ビルマの光と影

国際アジア歴史学会議に出席して

アジアの新動向①フォード政権の外交

②国民総和めざす朴政権の行手

③マラッカ海峡事故の国際的波紋

この人 ビレンドラ ネパール国王

竹内 実

パリス・チャン

ジョージ・ノーラン

丹羽 友三郎

話の広場——かね——ジャカルタのある運転手の話——インド問題の今日的意義——「後進国向き」の人材——企業進出の「自主規制」の是非

観測船——工業化へのジレンマ——注目されるラーマン政権の行方

アジア関係日誌 1975年2月

社団法人 **アジア調査会**

ビルマの光と影

——「ビルマ式社会主義」に春は来るか——



ジョージ・ノーラン

(ルポライター)

七四年三月にネ・ウイン政権は念願の民政移管を実現した。しかし、その民政移管の実態は軍服を脱いだ軍事政権の登場にすぎなかった。ビルマ式社会主義は過去一二年国民に多くの耐乏生活を強いた。経済はこの間停滞を続けた。人々はこの耐乏生活と軍人による諸々の統制に疲れてきている。六月には米不足からランダーンで暴動が起こり、多くの死者を出した。そして一二月にはウ・ダントの遺体をめぐって学生、僧侶、市民を巻き込む広範な暴動が起こった。わずか半年の間起こったこの二つの暴動は「ビルマ式社会主義」の前途多難を暗示している。筆者はウ・ダント事件から一カ月を経たこの一月にビルマを訪ねた。以下はそのルポである。

一、ビルマの現状

一月×日

最近の風潮

他の東南アジアの国々同様、ここ「社会主義の国」ビルマでも、入国の第一歩は空港でのあの余り愉快ではない白タタとの値段の交渉から始まる。外国人旅行者にとつてビルマの旅は何とも高いものになってしまう。一ドル四・五八チャットという公定レートは余りにチャットの実力からかけ離れているからだ。聞くところによるとヤミ相場は一ドル二一五チャット、タイとの国境で取引されている相場は一ドル二〇チャットという。これほど公定レートとヤミレートの差が大きいところは東南アジアにはないはずだ。戦時下にある南ベトナムや、今や陥落寸前のブノンペンでさえもせいぜい二〇%程度の開きである。しかも、ビルマでのヤミドル売買には当局の厳しい目が光っている。飛行機で一

緒になったオーストラリアの青年が空港から市内まで一五チャットというのにびっくりして、私と割りかんしようともちかけてきた。安いホテルに落ち着くとすぐ従業員が外国のタバコとドルを求めてやってくる。タバコは、ビルマにフィルター付きのものが一種類しかなくヤミ市で六チャットもするので、外国のタバコは高く売れるという。どうやら彼等は旅行者から五チャットで買ひ、ヤミで一〇チャットで売ららしい。

最近のビルマの社会的風潮を云いあてる言葉として「男は盗、女は娼」という言葉がラングーンの華僑社会の間ではやっていると云う。「盗」は必ずしも泥棒の意味ばかりでなく、人をあざむくことなども含んでいる。「正直者はバカをみる」「悪いことをしないと損だ」という風潮が男の間ではびこってきているという。もともとビルマには泥棒は余りいないが、それでも最近が増えていらいらしい。「娼」は女性の装いが最近とみにあでやかになり、お金や衣装のために自ら身を売つてもという感じの女性が次第に増えているということらしい。たしかにラングーンの若い女性たちは、貧しいにもかかわらずピンクや紫のきれいな衣装を付けてたいへん魅力的だ。(ただ、あの「タナカ」という、金脈問題で失脚した日本の前首相と同じ名を持つ、木の粉でできたお白粉の代用品だけはあまりいただけないのだが)。売春は厳しく禁止されているはずだが、それでも網の目をくぐって行われており、ラングーンにかなりの数のそうした家があるようだ。抑圧された社会であればあるほどその反動が服装などに表れると私のビルマの友人は説明する。私からみれば、ラングーンは実にのんびりとして、人々は正直で人なつこく、他のアジアの国々と比べると実

に安心できるところだと思ふのだが、彼等にとつては最近の風潮が嘆かわしいと映るのだらう。

一月×日

二月暴動(ウ・タント事件)について

この暴動に加わつた学生の一人が当日の様様を語ってくれた。「政府の処遇は極めて冷酷なものであつたので、我々はウ・タント前国連事務総長の墓をラングーン大学の構内に自らの手で作つた。二月一日の集会(通夜)には学生をはじめ僧侶、市民など約三千人が集まり、大学構内の広場から外にまで人があふれるほどだつた。午前二時頃約三千名の軍隊がこれを取り囲み一斉に検査にのり出した。抵抗もかなりあつたが、軍隊の銃剣で突き刺された者も多かつた。約二千八百名が逮捕され、うち学生は二百人、僧侶が三百人、そのほかは一般の市民だつた。学生の主要な者たちは事前に連絡が入り、逃げる事ができた」「学生達が逮捕されたのを知り、市民たちの一部は暴徒と化してヤミ市場や政府の事務所、交番、映画館、車、列車などを焼いた。軍隊はこれに対して機関銃で対応した。夜に入って政府は外出禁止令を出したため一応暴動は収まつた。」

学校は全て閉鎖されたが、一月六日に小学校が、一月一日に中学校が、そして二七日に大学を除く高校、専門学校が再開された。夜間外出禁止令は当初は午後六時から午前六時までだったが、次第に午後八時から午前六時、十時から六時と緩和され、現在は午後十時から午前四時までとなっている。午後十時以後の外出禁止でさえ、私のような宵張りにはとても早すぎる感じだ。友人は、ホテルのボーイも露店の商人たちも九時頃から帰宅の準備

を始める。おかげで私は何回か夕食をとりはぐれる目にあつた。

政府はこの事件が経済的不満から起こつたものか、それとも政治的な動機から扇動者によつて起こされたものかその結論をまだ出してないという。しかし、「一党独裁を倒せ!」「ファシスト政府を倒せ!」と叫ぶ者があつたと付け加えている。政府発表によると、この事件で一人が死亡、八一人が負傷。二千八百八十七人が大学構内で逮捕、うち千人がすでに釈放された。この事件による損害は一〇〇〇万チャットで三十八の政府事務所、交番四カ所、商店四三カ所、映画館十一、自動車六十五台、オートバイ四台、ディーゼル機関車一台、駅十五カ所が被害を受けたという。多くの人々はこの死傷者の数字に納得してない。ちなみに、米不足や激しい物価上昇に端を発して起こつた六月暴動では政府発表によると死者二十二名、負傷者七十三名となっている。

一月×日

くすぶる政府批判

ともあれ、六月と一二月に起こつた暴動の際に銃剣と機関銃で粉砕した政府のやり方は、ますます人々を反政府の方向に走らせる結果となつたように思える。私はまだビルマでネ・ウィン政権を評価する人に出会つたことはない。それどころか誰もが厳しい言論統制と悪名高い治安行政委員会の目を気にしながら、小さな声で怒りをぶつける。ある者は軍が特権階級をつくつていとう。軍の幹部は高給をはみ、佐官クラス以上は皆新しい大きな家が与えられるという。ある者は政府や軍の腐敗をいう。「彼らはウ・ヌー時代の政治家の汚職を批判したくせに、今では自ら配給物資をヤミに流したりしている」と。また、汽車で会つたらラング

ーン大学の学生たちは、七四年一月の人民議会の信任投票は全く信用できないものだという。彼らは黒(不信任)を白(信任)に勝手に変えた。さらに、「ビルマは灌漑を整備すればいくらでも二毛作ができる。大規模なプロジェクトが出来るはずなのに、中間でネコババして小さなプロジェクトで済ましてる」「軍と政府の高官はますます富み、貧しい者はますます貧する。彼等はロンドンの医者にかかたりする。しかも大衆の税金で」。白タクの運転手は、ラングーン近郊の貧民街を指している。「彼等は貧しいからという理由でこんなところにとじ込められている。気の毒に。そして豊かな奴らは街のなかにりっぱな建物に住んでいるんだ。」「奴らは国有化と称して庶民の財産を奪う。全く、ビルマ政府は泥棒政府だ。」また、ある老人は云う。「ネ・ウィン政権は一年以内に必ず倒れる。民心は完全に彼等から離れている。最大の批判勢力だつた学生と僧侶は今回の事件ではほとんど力を失くした。したがって残るは農民だ。今、政府は農民に力を入れてる。農民に物資配給を優先的に行い、彼等のごきげんをとつてゐる。しかし、軍の内部から反乱が起こるだろう。ウ・ヌーのシンバがかなりいるようだ。最近不思議なのは、首相と参謀長二人の名がウ・タント事件以後表に出ていない。一月四日の独立記念日にも出ていなかった」。

このように政府批判にはこと欠かない。しかしながら、私に云わせれば、人々のいう政府の腐敗や軍の特権にしても他の東南アジアのほとんどの国と比べれば足下にも及ばないものだと思うのだが、こうした激しい非難となつて出てくる要因は何なのだろうか、私はこうした政府批判の根底にあるのが彼等の経済的不満で

あるように思える。

停滞する経済

ビルマの経済はこの一二年間停滞を続けている。政府の統計によれば、ネ・ウィン政権一二年間の国内総生産は年率三・五%の伸びを示したが、この間人口が年率二・二%で増加したため一人当たりでは年率わずか一・三%の伸びにすぎなかった。こうした停滞の原因は、急激な国有化政策と未熟な軍人による国有化後の経済運営のまずさにあるといつてもよい。流通機構の混乱、価格政策のミス、官僚主義的企業経営などから生産意欲の減退を招いた。とくに、戦前最高三〇〇万トン、戦後最高二〇〇万トンの輸出実績を持ってビルマの経済を支えてきた米の輸出は、年々凋落の一途をたどり、一九六五～六六年度一一万トン、七一～七二年度五九万トン、七二～七三年度二四万トン、七三～七四年度は二七万トンと減少した。米輸出の減少は外貨手取りの著しい低下をもたらし、資本財、原材料、消費財などの輸入を大幅に縮小させる結果となり、これがまた経済の全般的停滞に拍車をかけた。豊富な資源を有し、戦前、英国の植民地のなかで最も豊かな国の一つであったビルマは今や一人当たりの国民所得は八〇米ドルと、世界の発展途上のなかで最も貧しい国の部類に落ち込んでしまった。

ネ・ウィン大統領は一九六六年に革命評議会でビルマの当面の目標を次のように語った。「戦前、我々は一年に一人当たり三枚のロンジー（男性用の腰巻き）を買うことができた。独立後は最大一枚という状況にある。私はこれを一人当たり少なくとも四枚買えるようにもってゆきたい」。しかし、現在はどうか？ 人口の

約八〇%を占める低所得層の人々にとつて一年に一枚が買えればよいほうだといわれる。私の泊まったホテルのボーイは「ウ・ヌー」時代の一九六二年には、ロンジー一枚が三チャットだった。その当時はヤミ市などはなかった。現在の政府の配給は一年にわずか一枚で、配給価格は一枚一五チャットもする。ヤミ市での価格は二五～三〇チャットと極めて高い」という。ちなみに彼の月給は最低賃金である月一〇〇チャットをわずかに上回る一二三チャットであった。

活気のあるヤミ市

ビルマの商品流通は、一九六七年の米騒動以後それまでの小売業の統制が緩和され、特定の品目を除いて自由に取引できるようになった。配給物資は交易公社から協同組合を通じて供給される。これらの品目としては米、砂糖、塩、繊維、石けん、ロウソク、灯油、タバコ、マッチなどの生活必需品の主要なものが含まれている。これらの配給物資は国内生産の不振や外貨不足からくる極端な輸入制限に加えて、国营流通機構の運営上の欠陥もあってしばしば極端に不足することが多い。これを補う形でヤミ市が非常に発達している。その大半が非合法であるにもかかわらず、ビルマの人々はその消費の多くの部分をこのヤミ市に依存しているものと思われる。ヤミ市の最大のものは街の中心附近にあったが、一二月の暴動の際に群衆の攻撃目標の一つとなり、商品が大部分奪われたという。政府はこれを機会にこの市場の閉鎖を命じたため、現在ではラングーン市内のあちこちに分散している。政府は最近このヤミ市を厳しく取り締まる方向にあるといわれるが、大衆の需要を満たすに足る配給がなければ、これをつぶすこ

とは困難であらう。

ヤミ市に出回る商品はタイ、中国、バングラデシュなどから密輸されたものが多く、とりわけタイの商品が大半を占める。最も多いのがカラフルな布地で女性の衣装用である。トランジスタラジオ、日本製の歯みがき、味の素、石けん、電池なども多い。出回る商品と価格は配給物資の供給状況と見合って動く。例えば現在、歯みがきと砂糖が極端に不足しているため、配給価格の七〇〜一〇倍もしている。米は約二倍、塩は四倍と総じて二倍から三倍の値段である。もちろん密輸品のほかに、配給で安く手に入れヤミで高く売られているものも多い。例えばガソリンの配給価格は一ガロン三・五チャットだが、ヤミでは一五チャットもする。配給を受けるために車が長蛇の列をなしているのをよく見かけることができる。

配給量が限られ、ヤミ市に多くを依存しているビルマの人々にとって最近の物価上昇は避けられないものがある。ラングーンのもの価は六二年から七二年まで年平均四%の上昇にとどまっていたが、七三、七四年の上昇ぶりは激しいものがあり、七二年四月から七四年四月までに五四%もの高騰ぶりを示した。おそらく、ヤミ物資を含めると、この数字はさらに高いものとなるはずである。米は、政府の集米機構の混乱や価格政策のまずさから、一時は配給必要量を確保できず、七四年一月には配給量を従来の一人当たり一カ月六 *pyi* (二一・八 *kg*) から二 *pyi* (四・三 *kg*) に落とさざるをえなかった。このため、ヤミの米価は大幅にはね上がり、これが六月暴動の誘因となった。その後、政府は買上げ価格の大幅引上げ等を含む強力な米の集荷策をとったため、一月から一人

一カ月五 *pyi* (一〇・七 *kg*) の配給ができるようになった。現在、どうやら米の価格は落ち着いているようだ。タイから入ってくる布地や砂糖、歯みがき、石けんなどはどうであるか？ おそらく世界的なインフレは増幅されてタイ国境から入ってきているはずである。にもかかわらず、賃金は物価上昇についていけない。

失業はどうか？ ビルマの労働人口については、産業別の就業者数のみ公表されており、失業者数はつかめない状況にある。一説には八〇九%といわれているが、最近はかなりの数に達しているようだ。とくに高校や大学を新規に卒業した者の就職口は極めて狭き門である。現在、新規学卒の約二〇%程度が職にありつける状況だといわれる。それ故、最近では月一〇〇チャットの最低賃金でもいいからという大学卒の者が増えているという。政府は学卒が他の人々の職を奪う結果になることを恐れて、最低賃金で学卒を雇うことをやめさせているとも聞く。学校を出ても職のない彼等にとって、唯一の手取り早い道はヤミ商人になることである。タイの国境に近いモルメインに買出しに行くヤミ商人にこうした学卒の青年がじつに多い。学卒の職のない青年達の存在はネ・ウィン政権にとってあまり好ましいことではない。だからこそ、ネ・ウィン政権は彼等に職を与えるに足る大規模なプロジェクトを探しているという。

一月×日

ネ・ウィン政権の功績

私はこれまでビルマの人々の政府に対する不満ばかりを書いてきた。たしかに、誰もがネ・ウィン政権の悪口ばかりを私に聞か

せる。しかし、私は若干彼の弁護をしなくなった。というのは読者の皆さんがこれらの不満だけに基ついでビルマを想像したら、それはあののんびりとして、楽しいビルマの現実とあまりかけ離れてしまうからである。だいたい、世界に国多しといえども、大衆が自国の政府を誉めたたえる国はほんの数えるだけにすぎないだろう。日本の三木政権はどうだろうか？

ビルマの人々は、「ウ・ヌー時代のほうがまだ良かった」とよく云う。しかし、人間は過去の嫌なことは忘れやすいものだ。そして、常に現状に不満を持つものだ。サイゴンでも、チュエー政権を嫌うあまり、パーベキエー時代をもたらしゴ・ディン・ディエム政権のほうがはるかによかつたと云う人が多かつた。日本ではどうだろうか。田中内閣時代に佐藤のほうが良かったと思わなかつたらうか。そして三木政権もしばらくすると、人々は田中のほうが良かったと思うのではないだろうか。

ネ・ウィン政権に対する批判は、「軍隊帰れ！」「人民議会反対！」「我々は昔の議会を要求する！」「一党独裁を倒せ！」「フアンスト政府を倒せ！」「米よこせ！」という、六月と二月の暴動の際にみられたスローガンに集約される。人々は一党独裁や軍による支配・統制に反対し、自由を求めている。とくに昔のブルジョワ階級にその声が強し、私に不満を伝える人たちのなかに「古き良き時代」を夢見ているものと実業家が何人かいた。彼等は「折あらば再び」とその機会をうかがっている。こうした右からの反動の力が根強いために、少しでも気をゆるめると昔の資本主義に戻ってしまうとネ・ウィン政権はタガを懸命に締めているのだらう。事実、一九六八年二月ネ・ウィン革命委員会議長はウ・ヌー

一元首相を含む左・右両翼旧政党内閣および少数民族指導者三十三名からなる「国内統一諮問委員会」を設置し、同委員会に対して政治、経済、社会、少数民族問題処理基本方針の策定を委嘱した。委員会は六カ月にわたり審議した後、複数政党制による議会制民主主義の復活を提案する多数意見と一党制を唱える少数意見を併記した報告書を提出したという。しかし、ネ・ウィン議長はこれを受諾しなかつた。

ネ・ウィン政権の果たした業績は数えあげればきりが無い。主なものをあげれば次のとおりである。第一に独立や自治を要求して武装反乱を起こしていた少数民族問題をどうにか抑え国家の統一を保持したこと、第二に農業、工業、流通、通信、運輸、貿易等基礎的生産手段を国有化し、人による人の搾取をなくすことに努めたこと。とくに農業部門では地主を追放し、小作料を撤廃して自作農を育成した。第三に最低賃金制を定め、労働条件を改善した。第四に教育、医療を国有化しその普及を推進した。国営病院はすべて無料治療で、さらに失業、退職、死亡、不具、病氣等に関する社会保障制度を導入した。第五に外資の流入を阻止し、経済の非植民地化に努めた。第六にウ・ヌー政権時代には党利党略のために仏教を利用し、これを国教化したが、ネ・ウィン政権は政教分離を実現した。これらはいずれもきわめて重要なことがらばかりである。だからこそ、ゼロ成長に近い経済をひきずりながら、今年こそ倒れると以前からささやかれながら、一三年間も政権を保持することができたともいえる。軍部独裁で反対できない体制であつたからという指摘は片手落ちと云わざるをえないだらう。にもかかわらず、高まる政府批判は覆うべくもない事実なの

である。

だからこそ、ネ・ウィン政権は現在、経済開発に力を投入している。一九七四―七五年度からはじまる新二〇カ年長期計画（当初一九七一―七二―一九九〇）の九一年を予定してスタートしたが計画と現実の乖離が大きすぎたため七四年三月に修正したもの）では国民の生活水準の向上と社会主義経済制度の確立に主眼を置いている。国内生産（GDP）の成長率を年平均五・九%と定め、開発のプライオリティーを第一に農業、林業の開発と輸出振興におき、次にこれらの生産増大を基礎とした輸入代替消費財生産工業の育成、第三に石油を含む鉱業生産の増大とこれを利用した重工業間の開発におかれている。

この長期計画を実現するために外国政府借款の受入れ額を拡大し、また石油開発にはネ・ウィン革命以来はじめて外資の導入が企てられ、世界各国の企業に鉱区を開放した。

国家の統一と経済のビルマ化を達成するために、鎖国に近い政策をとり、国内では国民に耐乏生活を強いてきたネ・ウィン政権は、一年に二つもの大きな暴動を経験した今、よりはつきりと経済の季節を迎えたことを知った。約束した「一人当たり四枚のロンドン紙」をいかにして実現するか、人々はそれをいつまで待たれるのか、いずれにしても余り時間がないことは確かなのだ。

二、モールメイン紀行

一月×日

泰緬国境貿易

ラングーンのパミ市とそこにあふれるタイの繊維品を見て以

来、ビルマ・タイの国境貿易に対する私の関心はますますふくらんだ。ラングーンのパミ商人たちはラングーンから汽車で七時間のモールメインに買出しに行くことを聞いて、私もモールメインを訪ねることにした。列車は一等と二等に分かれていたが私は二等を選んだ。パミ商人たちと語りたかったからである。全車輛とも座席指定で、人々は八時から売り出す切符のために早朝三時頃から並んで待つほどの混みようだった。私は外国人旅行者ということで幸いこの列に加わらないで予約ができたが、彼等に対してじつに済まないと思った。

十二両ほど連結された列車の乗客はすべてパミ商人とよってよかった。彼等の多くは若い青年たちで、休校中の学生や主婦、老婆なども多数みられた。私はどうやらこの列車にただ一人の外国人旅行者であるらしかった。人々は珍しそうに私を見た。私が隣の青年に話しかけると、どこからか英語を少しばかり話す少年を連れてきて通訳させた。いつの間にか十人から十五人の青年たちが私の囲りに集まり、通訳はラングーン大学の学生と高校生の役割になった。彼等は月四回モールメインに買出しに出る。なかにはモールメインからさらに船とバスを乗り継いで一日がかりで泰緬国境のミャワディ（Myawady）に行く者もいる。タイ製品が、ラングーンよりモールメインが約三〇%安、ミャワディがモールメインの二〇%安で買えるという。タイから買うものはすでに述べたように布地が圧倒的で、そのほか歯みがき、砂糖、味の素、ドライミルク、トランジスタラジオ、時計などで、その商品もビルマ国内の配給事情によって若干異なってくる。決済はビルマのチャットや金、宝石、米などで行う。この国境地区はカレン

族が支配していてビルマ政府はこれを取り締まれないでいる。

この泰緬国境貿易は圧倒的にタイ側に有利である。ビルマ側には根強い需要があって政府の配給はこれを満たせない。そしてビルマ政府はこの取引を禁じている。タイ側は比較的自由で、またどうしてもビルマから買わなくてはならないという商品はない。したがって、タイ商人はビルマ産品を買いたたく。ビルマのチャットもきわめて弱く、ミヤワディでは一チャット一バーツ（ドル二〇チャット）で取引されている。バンコクでチャットが一ドル一六バーツで買えるのはこのためである。最近ではビルマから木材も出はじめるほどにこの貿易は大きくなってきている。また、ビルマの骨とう品がこのルートで流出している。だからバンコクのホテルでビルマの骨とう品が比較的安く売られているのである。一方、タイ側の売る商品はきわめて高いようだ。日本の味の素や歯みがきなどは、タイでの価格の四〜五倍ともいわれる。ビルマにとって、この貿易はまさに「富の流出」であることはたしかだ。

政府は、この貿易をやめさせようと努力しているが、国境地帯は統制が及ばないし、なによりもこれら生活必需品の配給が乏しくてはしかなかった。ヤミ市を完全に禁止すれば人々の生活はたちどころに困ってしまう。だから取締りも厳格にできぬし、取り締まってもそれは「群がるハエをたたくようなもの」ということになる。それでも月に一度ほどこの列車を手入れするといふ。あるときはラングーン駅に列車が着いたときに、またあるときは、モールメインを汽車が離れたときに。一定量以上の品物を持っているとヤミ商売とみなされ、没収されるといふ。このときは列車

中が上を下への大騒ぎになる。隠したり、列車の外に投げたり、走る列車の屋根に逃げたりするといふ。

われらブラック・マーチャント

私は、汽車の中でビルマ語を教わることにした。「ゴゴンナネ（お早う）」「ジェズテマレ（ありがと）」「ジェノ・アメリカ・ラレ（私はアメリカから来ました）」などいくつかの言葉を教えると彼等は私を試した。「お早うは何と云ったっけ？」「ありがとでは？」私が正しいと笑い、拍手をし、間違うとどつと笑った。私の車輛のほとんどがこの「授業」に耳を澄まし、振り返って笑う。覚えてしまおうと、「今度は数を教える」「あれも」「これも」とたちまち二十ぐらいの言葉がでてくる。「よし、暗記をするからちよつと待ってくれ」というと彼等は私が目をつむったり、外を見たりして暗記している様子を見守った。小さな川があると、「川は何と云ったっけ？」「橋は？」また、お金を出して、「これはいくら？」こうして汽車はベグー、チャイトー、タトンなどの駅を過ぎて行った。列車が駅に停まると、彼等はバナナやゆで卵やカレーライスを大きな葉で包んだものや鳥の唐揚げなどを買って私に勧め、私が食べるのを見てまたはしゃいだ。なんとという明るさ。なんとという人の良さ。「男は盗、女は娼」なんてとんでもないと思ったりもした。列車中の人たちみんながお互いに仲睦まじく、食物を分け与え、子供が泣くと周りの青年たちがあやし、暑い窓ぎわを青年たちが老婆や子供連れの主婦に代わってあげた。まるで皆がお互い到一个の家族のようでもあった。政府の手入れがあるところとしてかばい合うのだから。彼等は自らを「ブラック・マーチャント（ヤミ商人）」と云う。しかし、その言葉が彼等の口

から出るとき、少しも暗さや恥じらいは感じられず、私には正々堂々いっばしの貿易商に思えたものである。

汽車は三時半にモウトマ駅に着いた。ここからわれわれは連絡船でサルウィン川を渡った。川は海のように広がった。船に乗ると彼等はパンを買い私にコーヒーをすすめた。カモメが群がって船の回りを飛んだ。カモメは「ブラック・マーチャント」の友達だった。彼等はパンをちぎり、カモメに与えた。手のひらにパンをのせるとカモメは羽ばたきながら空中で停止し、パンが投げられるのを待った。ジョナサンのように降下し、水面すれすれまで落ちたパンくずをとらえるカモメもいた。私はカモメと人間の美しい触れ合いに興奮してカメラのシャッターを何度も何度も押し続けた。

モールメインにて

モールメイン駅に着くと人々は両手に空っぽのカバンやケースを下げ、鈴を付けた馬車や人力車や小型トラックに座席を設けたバスに乗って彼等の親類や友人たちの家々に散っていった。

モールメインの街は古く、インドと英国と日本の古い港町を一つにしたようなムードがあった。駅の周辺にはヤミ市ではない様々な市場があり、活気があった。ヤミ市は街の中心から離れたところに四カ所ほど分散していた。通りの両側に台やマットを敷いて品物が広げられている。そして、一カ所は大きな広場全体がヤミ市だった。いずれも人々であふれ、まるでお祭りのようでもあった。私はそこでさつき別れた青年とまた出会った。彼は姉さんと二人で明朝六時の船でミヤワディに向かうという。私も一緒に行きかけたが、外国人はおそらくダメだろというので今回は

断念することにした。

サルウィン川に沈む夕陽は美しかった。私は川岸に並ぶ露店の一つで夕陽に魅せられて早い夕食をとった。

三、ビルマと中国

一月×日

中緬関係の推移

ビルマと新中国との関係は、一九五〇年六月以後公式の外交関係と「人民外交」の二本立てで徐々に発展したが、一九五四年ジュネーブ会議の年にそれが急速な進展をみた。この年、周恩来総理はビルマを訪問し、ウ・ヌー首相とともに共同コミュニケに署名して「平和五原則」を確認した。中国のA・A（アジア・アフリカ）外交のはじまりであった。ウ・ヌー首相もまた北京を訪問し、総領事館の増設、航空路および道路交通の開設、通信および貿易に関する協定を締結した。さらに、「相手国に居住する自国民に対して、互いに相手国のすべての諸法規を遵守することを促し、これらに留相手国人の国籍問題を協議、かつ国境問題を友好的に解決する」という同意もなされた。また、ウ・ヌー首相はこの北京訪問中、「中国に敵対して行われる破壊工作または軍事的行動の基地として、ビルマ領土を使用させることはいかなる国にも絶対許さない」と公約した。一九六〇年には両国の間で相互友好不可侵条約が締結され、国境協定の調印もなされた。そして六一年に中国はビルマに八、四〇〇万ドルの援助を約束した。

一九六二年三月ビルマの体制はクーデターによってウ・ヌー政権からネ・ウィン軍党政権にとつてかわることになった。ネ・ウ

イン政権はビルマの統一に力を注ぎ外には中立、内には反共政策を採った。ネ・ウィン政権の敵しい共産主義者に対する弾圧にもかかわらず、中国、ビルマの友好関係は引き続き維持されることとなった。

しかし、中国に文化大革命が起こるとその影響はビルマの中国人の間にも飛び火した。毛沢東思想の学習会が盛んに開かれるようになり、華僑学生たちは毛沢東のバツジを着用した。この頃は、六五年に新聞の国有化による華字紙（中華商報、中国日報、人民報、新仰光報）の発刊停止、六六年に学校の国有化による華僑学校の廃止、さらには六三年の中国銀行、交通銀行（華僑に対して低利融資などの便宜をはかってきた）の国有化、また貿易、商業、製材、鉱山、精米など華僑が掌握してきた事業の国有化などによって華僑の間に反政府感情が高まっていた時でもあった。それだけにより一層華僑の民族意識が増幅されていた。華僑学校の教師たちの一部は廃校となつてのちも学校にとどまり、毛沢東思想を説いた。

折も折、国有化による流通機構の混乱や天候不順による農業の不作のため、六七年春頃から米不足に陥り米騒動が起こつていた。ビルマ人に日頃から金持ちの華僑に対する反感が芽ばえていたし、そのうえ米不足による経済困難、一方、華僑側に民族意識の高まりというように衝突の土壌ができていた。

暴動は政府の毛沢東バツジ着用禁止に反対する華僑学生とビルマ教師との間の衝突に端を発して六七年六月二十七日に起こつた。華僑弾圧は三日間続き戒厳令がしかれてやっと収まつた。この間に中国の派遣技術専門家一人、華僑の教師連合会の四十人を

含む約百五十人の中国人が殺されたという。この事件の背景には米騒動によるビルマ住民の不満を中国人に転化させるという政府の意図もあったといわれ、中国側はこれに抗議し、大使館員の引揚げ、援助の中断などの対抗措置をとつた。

その後、両国関係の再開は七〇年末まで待たなければならなかつた。七一年八月ネ・ウィン議長が訪中してこの事件について謝罪し、一方、周恩来総理は「在外華僑は居住国の法に従うべきだ」という中国の方針を語つた。さらに中国は中断していた対ビルマ援助の再開を約束した。その後、七一年一〇月ビルマ政府は暴動の際に死亡した四十人の華僑教師の墓を立てた。ビルマにとつて隣国の大国の存在は余りに大きすぎた。国内の反乱勢力中最大の白旗共産党は中国の影響を受けている。したがってビルマは中国との不仲を続けることは好まなかつた。中国にとつてもそれは同様であつたらう。地理的にみても中国にとつてのビルマの重要性は一目瞭然であるし、そのうえソ連がビルマに力を入れつつあつた。それゆえに、中国はネ・ウィン議長を歓迎し、毛沢東主席も彼と会見した。

一月×日

中国のビルマ援助

一九六一年九月に約束した八、四〇〇万ドルで中国は十四のプロジェクトを着工あるいは計画した。しかし、中断した時点で九〇％以上で工事がついていたものは Kunlong 吊り鉄橋（一〇〇％完成）、Billin 精糖工場、Mekinda 紡織工場、Swa 合板工場だけであった。これらは現在稼動している。Taka 吊り鉄橋は橋ゲタだけで中断したが、再開して昨年中国側の手で完成させた。製紙

工場はビルマの竹を原料とする興味深いもので年産四〇トン予定していた。完成度七五%で中断したあと日本の兼松が引き継いで完成させた。発電設備と苛性ソーダ回収装置を備えているという。このほか、Thamainの紡織工場がある。この工場は独立直後の一九四八年に米国の援助で建設された。紡機二万錘で操業を始めたが、紡機が米国产原綿を使用できるよう設計されているため、五七年に中国がビルマ産原綿を使用できるよう改造し、さらに中国の援助で二万錘が新設されたといわれる。

六七年に援助が中断されるまでに使用した金額は二、七〇〇万ドルで、残り五、七〇〇万ドルについて再開されることになっており、現在紡織工場と発電所が予定されている。紡織工場は四万錘の規模でThamain工場の拡張という形をとり、すでに中国人技術者が工事にとりかかっているという。発電所は現在フィージビリティ調査中で中国人技術者七名がラングーンのママダー・ホテルに滞在している。規模はかなりのもので灌漑もあわせて計画しているようだ。

一月×日

中国・ビルマの国境貿易

ヤミ市に中国の衣類や薬、ライターなどが売られている。薬はかなり多いがそれでも一二月暴動以後ヤミ市の取締りが厳しくなっていて中国品は少なくなつたという。私が見かけた衣類はいずれも暑いビルマには不適当な厚手のものだった。国境から密輸入してくるため、ビルマの北部のラシヨールやマンダレーには中国品が多いと聞く。私はラシヨールに興味を持ったが、飛行場で外国人はダメだと断られ、ついにラシヨール行きは断念せざるをえなかつた。

た。それにしても、彼等の仕事ぶりは無責任もいところだ。切符を買いに行くとき「担当者が今出かけていない。俺はその担当ではないからわからない」とくる。しばらく待って担当者が帰ってきた。すると「ちょっと待ってくれ今予約リストを探している。どこへ行ったかな？ 皆知らないか？」と聞く。三〇分ほど探してやっとリストを見つめる。そのノートはポロポロだ。「運賃はいくらか？」と聞くと、「ちょっと待ってくれ今聞いてくる」といって上役のところに行く。そして上役が出てきて「外人はラシヨールには行けないことになっている」という。この間約一時間。これでは経済も停滞するはずだ。国有化して、皆で平等に資源を消費しているように思えてくる。彼等は学問がないのではない。ビルマの人たちは教育熱心だ。古来、僧院による寺子屋式教育が普及しており、独立以来政府は教育に力を注いできた。おそらくアジアの中でも教育水準は高いところにあるはずだ。問題は労働へのインセンティブがないことだ。

夕刻、華僑街で薬屋を営んでいる中国人青年と知り合った。ラングーン大学を卒業した快活な好青年だった。彼がビルマと中国の国境貿易の実話を話してくれた。彼は最近忙しくて行っていないが二年前頃まではよくラシヨール、そして中・緬国境へ買出しに行つたという。彼によると、中・緬国境は高い山や川が国境を形づくっているわけではないので簡単に往来できるという。検問所もとくにないらしい。ビルマは中国から薬、繊維品、ライター、雑貨などを買い、支払いは生きた豚、薬草、宝石、金などが多いという。この貿易はまさに密輸入でビルマ政府は禁じているが、中国の場合はどうなのだろうか？ 貿易を厳重に国が管理し

ているはずの中国でもこのように密輸が行われているのだろうか。それとも政府は知っていても黙認しているのだろうか。あるいは国境周辺の人民公社に正式にこの種の貿易を行う役割を与えているのだろうか。興味あるところである。

参考までに中・緬国境貿易を古くさかのぼってみると、一九世紀ビルマ王国とシナの貿易は陸路雲南を経て行われていた。ヘンリー・コールの記録は次のように語っている。「中国がビルマから輸入したのとして綿花、ヒスイ、ビンロウジの実、アマツバメの巢、カワセミの尾、鹿の角、コハタ、ルビーなどがある。とりわけ綿花が一番多く、一八五四年に合計二二万五〇〇〇ポンド、ヒスイは約一〇万ポンドであった。ビルマからの輸出は華僑の手で行われた。一方、ビルマが中国から輸入したもののうち最大のものは絹でそのほか金、銀、銅、水銀、亜鉛などの金属、鉄製の鍋釜、紙、朱、ワックス、ビロードなどの雑貨、ハム、蜂蜜、茶、酒、クルミ、タリ、乾燥果実などの食料品がある。雲南からのキャラバンが運んでくる。一八五四年はビルマの一〇万五〇〇〇ポンドの出超であるが、この出超分は金および銀の輸入によって決済された」。

一月×日

ビルマ化する華僑

ビルマの華僑はどことなく東南アジアの他の国の華僑たちと違う感じがする。おっとりとして、にこやかで人なつこい。どこの国でも華僑たちはビリビリと張りつめている感じがしたものだがここはちがう。アジアのどこにでもある華字紙も持たず、華僑学も持たず、貿易や各種の事業を失い、ビルマ語を話し、すっか

りビルマ化してしまったかのようにもみえる。全国に約二五万人、そして福建と広東出身が多いというが、マンダリンをよく話す。

六三年にネ・ウインが政権をとってすぐ、社会主義を嫌って大商人の一部(数百人)がマレーシアや香港や米国などへ出ていったという。六七年の暴動のあとで約一万五〇〇〇人ほどが中国に帰った。陸路で国境を越えて帰った者もかなりいたがその数は不明である。航空便は一週に二便だったので一年待ってやっと中国行きの切符を手に入れることができたという。ネ・ウイン政権は華僑の帰国を歓迎したが、中国側にとっては喜ばしいことではなかったろう。帰った人たちのうち、生活に困って国境あたりでビルマ政府の変わるのを待っている人たちがかなりあるとラングーの華僑たちは云う。

華字紙を失い、もっぱら国有化された政府のしかも記事の少ない新聞で外の国のできごとを知るだけだが、華僑たちにとってラジオという祖国のことを知る手段がある。中国から流れてくる放送は北京語、広東語、福建語、ビルマ語などで語られている。したがって彼等は中国のできごとをかなり知っている。祖国を彼等はどうのようにみているのだろうか。「祖国が強大な国家になりつつあるのは実に嬉しいが、中国に帰る気は全くない。また、ビルマが中国のようになるのは好まない。統制があるとはいっても、ここには中国にない自由がある」。これが何人かの華僑たちと接して得た代表的な意見であった。